

「ツマゴミ」について

石井庄司

スサノヲノミコトの出雲における御歌作に対して、ほんの小さな報告をいたします。

古事記に

夜久毛多都、伊豆毛夜弊賀岐、都麻碁微爾、夜弊賀岐都

久流、曾能夜弊賀岐袁

とあり、日本書紀に

夜句茂多菟、伊都毛夜霸餓岐、菟磨語味爾、夜霸餓枳菟
俱盧、贈廼夜霸餓岐廻

とあり、一首のうちほとんどが共通であり、わずかに第三句に「ツマゴミニ」と「ツマゴメニ」のちがひがあるところとは、だれもよく承知しておられるところでありませう。

契沖の厚顔抄上に、「ツマゴメニ」は二つの意味があつて「妻隠に」と「妻共に」と言い、「古事記に、都麻碁微爾とあるは、其義近きにや」と述べましたが、宣長の古事記伝では、「さて微の字、書紀には昧とあり、其は意いさゝか異なるべし、碁微は碁母理の約り、碁昧は碁母良世の約りなれば、碁昧のときは、夫婦を隠らせむ料にと云意なり」とあり

ます。

内山真童の古事記謠歌註には「夫妻隠也。碁微はゴモリの約り、書紀には菟磨語味と有り、是はコモラセの約り也」とあり、荒木田久老の「日本紀歌解楓乃落葉」には「妻をこめむがためにといふ意……。古事記に都麻碁微爾とあり」と指摘しております。

古今和歌六帖一、雲には、第三句「妻ごめに」とあり、藤原俊成の古来風体抄上にも「つまごめに」とあります。ずつと後のものでありますが、村田春海の「琴後集」にも、真乘院雪岡禪師のものとから送られた雅俗弁を論じてこたふる書と云うのにも「妻ごめに八重垣つくる」という句があります。歌書も歌論書も、後の歌文集にも、みな、日本書紀の形が多く伝わつていて、古事記の「ツマゴミ」の形は、あまり行われていないようであります。

「風葉和歌集」の序に「やまと歌はやくもたつ出雲八重垣にはじまり」と述べ、「古今著聞集」の和歌の條にも「和歌は素盞鳴の古風より起りて」といふうに書かれて、全くわ

が国の歌のはじまりとされているのでありますが、それは、古事記の形を伝えず、日本書紀の方を多く伝えてきているのであります。五十嵐力博士が「国歌の胎生及び發達」としてわが国の短歌の生命について深い研究を発表されましたが、その本文は「ツマゴメニ」の方でありました。

この重要な御歌は、日本書紀卷第一、神代の上、宝劍出現章の本文の中の「或云」として細字で出ているのであります。一條兼良の日本書紀纂疏本のように大字のものもありませんが、とにかくそういう形で出ておるのであります。古事記では、話の本筋の上に堂々と出てきております。それだけに、この第三句においては、記よりも書紀の形の方が広く行われたということになります。

ところが紀州新宮の水野家で刊行せられた丹鶴叢書の「日本書紀」を見ますと「味」はどうも「味」のようではありません。丹鶴叢書のもとになつたものは、今日所在が不明であります。丹鶴叢書の本では「味」となつております。なお朝日新聞社の六国史本の頭註に指摘されていますように「類聚国史」でも、この句は「味」となつているのであります。

古事記の方の「コミ」の「微」が乙類の仮名である故、コミ、コム、コムル、コムレと上二段に活用したものであることは、はやく橋本進吉博士の指摘せられたところであります。ところが、その「味」もまた乙類で「微味未尾」と共通

のものであることは、また同博士の研究の通りであります。そこで丹鶴叢書本、または類聚国史によれば、記と書紀とは、異同がないことになるのではないのでしょうか。

さて万葉集卷十七の三九九八に

わがやどの花橘を波奈其米爾たまにぞあがぬく待たば苦
しみ

という石川朝臣水通の作というのがあります。「米」は、乙類で「味」と共通であります。万葉集には「コメ」の用例はこれだけしかありませんが、後の歌集には例があります。

垣越しに散り来る花を見るよりは根ごめに風の吹きもこ
さなむ

後撰集卷三、春下に出ています。また源氏物語、さわらびの巻にも

袖ふれし梅はかはらぬ匂にて根ごめうつろふ宿やことな
る

というのがあります。伊勢の歌も、伊勢集によると、「根ながら」となつているように「根ごめ」は、根モロトモということであります。ツマゴメもこれと同じような意味でゴメの方が多く共通されたのでしよう。ところで「味」も「米」も共に乙類で流布の仮名となつています。ゴミの例は万葉集にはありません。ところが、仮名の方から言つてよく似ているのは「トドメ」「トトミ」であります。さきに例をあげてみ

ます。

- (1) なつそひく海上潟の沖津洲に船は等杵米むさ夜更けに
けり……(十四の三三四八)
- (2) 朝されば妹が手にまく……玉の浦に船を等杵米て浜び
より……(十五の三六二七)

(3) 青によし奈良をきはなれ……なげかくを等騰米もかね
て……(十七の四〇〇八)

(4) 焼大刀をとなみの関にあすよりは守部やりそへ君を等
登米む……(十八の四〇八五)

(5) 天地の遠きはじめよ……流るゝ涙等騰米かねつも
(十九の四一六〇)

(6) 大王のまけのまにまに……わかれがてにとひき等騰米
慕ひしものを……(二十の四四〇八)

(7) 世の中のすべなきものは……ときのさかりを等等尾か
ね……(五の八〇四)

(8) ときはなすかくしもがもと思へども世のことなれば等
登尾かねつも……(五の八〇五)

(9) 行く舟を振り等騰尾かねいかばかりこほしくありけむ
松浦佐用姫……(五の八七五)

以上(1)から(6)までは、一字一音の「トドメ」の例でありま
すが、なお卷十八の四〇三六に「いかにある布勢の浦ぞもこ
ゝだくに君が見せむとわれを等登牟流」の用例があつて下二

段活用であります。それに対して、(7)以下の「トドミ」の外
には、卷八の一七八〇の長歌に「夕塩の満の登等美」という
体言の例があるだけでよくわかりません。「美」は甲類であ
つて、「尾」とは自ら異なることを示しているものと思われま
す。

卷十四卷の三三五九に、

駿河の海おしべに生ふる浜つづら汝を多能美母にたがひ
ぬ

というのがあります。また卷五の九〇四のように「大船の思
ひ多能無に」という例があり、四段活用と思われれます。

これに対して、卷十四の三四二九には、

とほつあふみ伊奈佐細江のみをつくしあれを多能米であ
さましものを

というのがあります。この「米」は乙類で下二段活用と考え
られます。

もう一つ「潜く」ということばには、左のような用例があ
ります。

卷十八の四一〇一 可都伎とるといふ

十六の三八六九 可豆久とも

十八の四一〇三 可豆久ちふ

十九の四一五八 鵜八頭可頭気て

「伎」は甲類で四段活用、「気」は乙類で下二段活用とい
うことがわかります。

記・紀両者の関係については、いろいろの問題がありま
す。ただ両者の相違点だけを多く見て、その間における共通
点を過小評価するのはどうかと思います。

わずかに一、二写本についての事実でありますから断定は
さしひかえねばなりません、八雲立つの御歌作は、記紀の

二つとも全く同じことばと見てよいのではないかと思いま
す。そういう点で万葉集のことばについての研究が大きな暗
示を与えてくれるものではないかと考えます。そして、賀茂
真淵のとられた古典研究の方法が、今もなお生きてるので
はないかと申したいのであります。

一 提 案

万葉の關係文章に、何巻何番の歌といふ
事を書き表す書き方は、決められるものな
ら一定したらどうだらう。これは、番号だ
け書く時は問題にならない。巻数と併記す
る時に起る。一番普通に書けば、二巻二一
三・六卷一〇四八・十八卷四一〇一といつ
た書き方であらう。ところがこれに対し、巻
二・二一三といつた書き方がある。又巻数
や番号を西洋数字で装す人もある。本誌所
載石井庄司氏の論文では、巻二の二一三と
いふ記載法が表れてゐる。これ等の内のど
れがいいかを、みんなで決めたいと思ふ。
かういふ上代文学全体の専門研究誌などは
これを決めるに一番いい機関だと思ふ。

筆者自身は、三十年間一貫して第一の普
通平凡の記し方に従いてゐる。それは平凡
だが一番すぐれてゐるからである。
例へば第二の書き方を見るに「二巻二一
三」は五字なのに「巻二・二一三」といふ
記し方は六字である。僅か一字といふな

れ。これが何百何万と現はれる講座や雑誌
や辞典では、一字の違いはすぐ何百何千の
違ひになり、それが原秩書く手間。活字を
探す手間。校正の時間。校正は初校・二校
三校……と手間を重ねる。絶体として大変
な精力と時間との労費である。学者の仕方
は、が一箇独立の活字である事を御存知な
いから、一つぐらゐ有つても無くても考
へて「二巻二一三」も「巻二・二一三」も
同視して第二の書き方を探つて居られるだ
らうがトンデモモハツンである。印刷所にも
編輯所にもこんな三重四重の手間のかか
る書き方は早く無くなる方がいい。その上
これは、用例を幾つも連記する時に実に困
る。第一の書き方だと「二巻二一三・六卷
一〇四八・十八卷四一〇一」と書けばいい
の。それが第二の方法だとやれやれ。窮余
の一策として「巻二・二一三、巻六・一〇
四八、巻十八・四一〇一」といふ方法も時
々見えるが、読むにまぎらはしく、執筆者
の知らぬ植字校正の苦勞がひそめられてゐ
る。「・」と「、」とは、まぎらはしくて、

植字も校正も殊に難物である。石井氏の記
載法は、その点「二の二一三・六の一〇四
八・十八の四一〇一」となるから、第二の
書き方にまさる。ただこの石井氏は、文章
の中に、巻二の二一三の第二句の方が、巻
六の一〇四八の第二句よりも優秀である、
といつた風に現れる場合に困る。こんな時
は、二巻二一三の第二句の……とあつた方
が全然まぎれなくていい。
最後に、西洋数字を使ふ方法は紙面が見
苦しい感じにさへならねば採用して良い方
法ではあるまいか。これは空間が省け活字
が省ける。創元社の万葉集講座第四巻の枕
詞全訳の用例をあげる時に使つたが「2・
二一三」といふ書き方である。これは縮め
て「2二一三」としてもいい。「2二一三・
6一〇四八・18四一〇一」といふ事にな
る。第二の法式とよく見くらべられたい。
十一巻以後の巻数を、11 12 13……といふ風
に、日本活字の一字ふんのスペースですま
せ得る所が、この書き方の特色である。

〔森本 治吉〕